

清代マンチュリア史に関する研究史の整理 —露清関係史、中朝関係史を中心に—

Reviewing the Historical Studies of Manchuria in the Qing Era

塚 瀬 進*

Susumu TSUKASE

はじめに

第1章 露清関係史

①概説

②清朝前期—アイグン条約、ペキン条約の締結
まで

③清朝後期—アイグン条約、ペキン条約締結後

第2章 中朝関係史

①境界地帯をめぐる問題

②朝鮮人移民

③交易関係

④間島問題および史料

文献リスト

日本語

中国語

英語

はじめに

清代マンチュリア史についての研究は大きく進展しており、多数の新たな事実や論点が主張されている。筆者はこれまで、清代マンチュリア史に関する研究史整理の論考をいくつか発表してきた[塚瀬進2012、2013]。本稿では、マンチュリアをめぐる露清関係史と中朝関係史についての研究を整理してみたい。

第1章 露清関係史

①概説

戦前に出された、マンチュリアをめぐる露清関係史についての概説的な著作には以下がある。宮崎正義[1922]は、ロシアによるシベリアへの勢力拡大から北京条約の締結までを、ロシア語文献、漢文史料を典拠に述べている。内藤智秀[1942]は典拠文献の注記はないが、清初からロシア革命までの概略について記述する。サツヴィン[1935]は、シベリア征服の開始から1924年までのロシア(ソ連)と中国(清朝)の関係史であり、日露戦争までは露清関係史を基調に叙述し、以後はロシア(ソ連)、中国、モンゴルの関係史を叙述している。ベ・ア・ロマノフの著作は、今日でも19世紀以降のロシアによる満洲政策に関する基本文献の一つである。ロマノフの翻訳[1934a、1934b]は二つ出版されている。岩間徹[1941]は、主にロマノフの著作とウィッテの回想録に依拠して叙述しているが、20

*環境ソーリズム学部教授

世紀前後の概略を知るにはよい。

論文としては、下田禮佐[1930]は清初から天津条約の締結までの経緯を要領よく述べている。塙作楽[1940]は、ロシア側の動向は英文著作に依拠しているが、清朝側の動向は『大清実録』や『籌辦夷務始末』を使って考察しており有用である。中国では蒋廷黻[1932]が、清初から北京条約について概略している。

戦後では、吉田金一[1974]が清初から19世紀までの概説をバランスよく叙述している。大畑篤四郎[1967]は、研究整理として有用である。大橋興一[1974]は、ロシア史の観点からではあるが参考になる。中国では中国社会科学院近代史研究所[1978a、1978b、1981、1990a、1990b]が概説書を刊行している。佟冬主編[1985]は、順治年間から1920年前後までのロシアと清朝(中華民国)の関係史について述べている。民衆闘争の叙述に力点を置いているが、一次史料を多用しており参照する価値は高い。英文では、19世紀前半については必ずしもマンチュリアとの関係だけを考察しているわけではないが、Quested[1968]が参考になる。19世紀後半以降については、Malozemoff Andrew[1958]、Quested[1982]が代表的である。概説ではないが、露清間の国境問題についた考察したS.C.M.Paine[1996]、マンチュリアへのロシアの勢力拡大を検証したDavid Wolff[1999]は必読の研究である。

清朝前期の露清関係史の概説については、張維華[1997]の著作がある。劉毅政[1991]は、ネルチンスク条約締結の前後についての概説である。吉田金一[1984]はネルチンスク条約前後の露清関係について、漢文史料とロシア語史料を比較検討して考察した優れた研究である。史料、関係文献については、吉田金一[1978]がまとめている。

②清朝前期－アイグン条約、ペキン条約の締結まで

順治年間に起きたロシアと清朝の衝突については、阿南惟敬[1964]が考察している。衝突した場所については、野見山温[1977]、趙鳴岐[1982]が考証している。順治年間に清朝がマンチュリアで動員できた兵力は少なかったため、清朝は朝鮮に援軍を要求していた。朝鮮軍の派兵については、稲葉岩吉[1934]、楊昭全[1982]が考察している。

藤本幸夫[1991]は、この時参加した朝鮮軍の將軍申瀏が記述した行中日録である『北征録』の翻訳、解説をしている。清朝は順治年間では寧古塔を拠点として、ロシアと抗争していた。寧古塔をめぐる状況については、孫秀仁[1979]が考察している。

康熙年間の状況については、楠木賢道[1996]が1684年(康熙23年)の「黒龍江將軍衙門档案」を訳出して、アルバジンでの戦い前夜の状況について考察している。康熙帝がおこなった防衛策については、解立紅[1992]、徐立亭[1999]、白洪希[1999]、趙文鐸[2001]、楊建林[2007]が明らかにしている。

アルバジンでのロシアと清朝の戦いについては、阿南惟敬[1965]、閻崇年[1978]、馮堅[1980]、張丹卉[2008]が検討している。アルバジンの戦いに参加した武将郎坦については、関大虹[1994]が考察している。金鑫[2009]は1685年の第一次アルバジン攻撃で、ロシア人捕虜は何人いたのか、ロシア側から取り戻した「中国人」は何人いたのかを档案を使って検討している。吉田金一[1969]は、清朝はアルバジンで捕虜にしたロシア人は「俄羅斯佐領」に組織し、その子孫は19世紀後半にも実在していたことを考察している。

ネルチンスク条約の締結過程については吉田金一[1981]が、その内容については入江啓四郎[1967]、野見山温[1959]が検討している。増田忠雄[1941a]、吉田金一[1983]は、ネルチンスク条約により定められた国境について考証し、龐昌偉[2001a、2001b]はネルチンスク条約では未画定であった範囲について考察している。

吉田金一[1980]は、台北の国立中央図書館所蔵の『吉林九河図』を検討し、この原図がネルチンスク条約の国境交渉の際に使われたとみなし、清朝はアムール川河口付近の地理について十分な知識を持っていたと主張した。これに対して松浦茂[1997]は、「黒龍江將軍衙門档案」を分析して、ネルチンスク条約締結後の1690年(康熙29年)に清朝はアムール川左岸に調査隊を派遣して国境策定に必要な調査をしていたこと、この調査結果をもとに「吉林九河図」は作成されたと主張した。呉雪娟[2009]も、「吉林九路図」はネルチンスク条約後におこなわれた国境巡辺の結果として作成されたと主張している。

ネルチンスク条約により清朝とロシアの間には

国境が誕生した。この国境は近代主権国家の国境のような、厳密かつ排他的なものではなかったが、両者を分かち性格は持っていた。ロシアと清朝の国境についての概略は、増田忠雄[1941c]、矢野仁一[1944]がまとめている。ネルチンスク条約後の国境の状況については、呂一燃[1994]、劉遠圖[1993]が検討している。趙中孚[1970]は、台北の中央研究院近代史研究所所蔵の档案を使い、国境交渉の経過について分析している。

清朝はロシアとの国境付近の状況を知る必要性を認識し、調査隊を派遣して地図の作成に取り組んでいた。そうした活動については、松浦茂[1997、2001]、承志[2007、2009]が考察している。また、清朝はロシアへの備えとして卡倫を設置し、国境近隣を定期的に巡察することをはじめた。清朝がおこなった対ロシア防衛については、呉文衡[1980]、徐景学[1980]、栗振復[1983]、胡宝林[1985]、周喜峰[2007]が考察している。卡倫については、姜涛[1992]、宝音朝克圖[2004、2005]、関克笑[1985]が検討している。巡察制度について、宝音朝克圖[2003]は①卡倫に兵士を駐屯させ、周囲を巡察させる(卡倫巡查)、②卡倫の兵士がきちんと勤務しているかを巡察する(巡查卡倫)、③定期的に兵士を国境近隣の巡察に派遣する(察辺)という三形態に分類して説明している。また、李士良[1978]も参考になる。呉文衡[1982]は巡察制度の概略について述べ、1851年にアルゲン河方面を巡察した時の報告書(原文は満洲語)を中国語に訳している。

清朝の調査隊はアムール川左岸以北に国境の石碑を立てたが、駐防兵力は右岸に置き、左岸は巡察で対応していた。つまり、清朝はロシアとの国境はアムール川左岸以北にあると認識しながらも、左岸には常駐的な兵力は配備せず、19世紀半ばのアイグン条約、ペキン条約の締結を迎えた。

中国人研究者はロシア語史料の翻訳もおこなっており、ロシア語を習得していない研究者には有用である。郝建恒[1989]は、17世紀の露清関係に関するロシア語史料を翻訳している。劉声明[1998]は、主に1640年代から1680年代までの露清関係史に関するロシア語史料の翻訳をしている。

③清朝後期－アイグン条約、ペキン条約締結後 アイグン条約締結前のアムール川流域でのロシ

アの活動については、ネヴェリスコイの事跡を述べた満鉄弘報課編[1942]が参考になる。また劉淑杰[1994]も検討している。アイグン条約締結に尽力したムラヴィヨフの活動については、山添博史[2003]が考察している。この時の清朝の対ロシア防衛について孔艶波[2008]は、防備の力点は盛京に置いていたこと、太平天国の乱鎮圧のため多数の軍隊は関内に移動していたので、清朝は十分な対応ができなかった点を指摘した。James R. Gibson[1968]は、アムール川流域でのロシア勢力の拡大過程について述べている。

アイグン条約の締結をめぐるのは、坂野正高[1959]、韓来興[1988]、張宗海[1988]が考察している。柳沢明[2010]はアイグン条約以降の露清関係の変化について、すぐれた分析をしている。天野尚樹[2001]はアイグン条約により画定した露清国境について考察し、①地理学上のあいまいさ、②国境を画定するという行為＝条約認識のあいまいさ、③領域主権概念のあいまいさ、という3つの「あいまいさ」により両国間には認識のズレが存在したことを指摘した。陸欽墀[1991]は国境画定をめぐる交渉について検討している。

アイグン条約、ペキン条約により新たな国境が設定されたが、細部については未確定な場所もあり、以後ロシアと清朝との間では交渉がおこなわれた。東部国境は河川や湖などの自然地理により画された国境ではなく陸上を国境にしたので、トラブルが頻発した。東部国境の状況については、戦前では増田忠雄[1937、1939]が考察している。戦後では吉田金一[1992]が詳細な考証をしている。中国では姜長斌[2007]が、古代から2004年までの東部国境の問題について述べている。全体的な論調は、中国はロシアに苦しめられてきた点の検証にあるが概略を知るにはよい。王奇[2008]は、東部国境に関する中国、ロシアの研究成果について詳細に考察しており、必ず参照しなければならない研究である。東部国境については、董万倫[1977、1978、1979、1981]、歩平[1983]、王寧[1986]、延辺歴史研究所[1987]、李健才[1991]、王兆明[1993]、張本政[1993]、呂一燃[1994b]、劉遠圖[1994]、宿豊林[2011]も考察している。西部国境については、増田忠雄[1941b]が17～20世紀初頭まで状況について概観している。また韓狄[2001]も考察している。

アイグン条約、ペキン条約以後、ロシアは沿海州、外バイカル州の経営を始めた。その動向はマンチュリアにも影響をおよぼしたので、その状況を知る必要がある。日本語ではイゴリ R.サヴェリエフ[2005]がもっともまとまっており、19世紀後半からロシア革命までの時期について考察している。中国語では、王奇[2003]の研究がすぐれている。徐昌漢[1983]は、ロシアの史料館所蔵文書を使って極東ロシア領の状況について検討し、1880年代に人口が急増した原因は金鉱の開発が主因であり、農業移民の増加ではなかったという論点を主張している。薛衛天[1991]、王麗恒[2001]、常勝(B.扎采平)[2008]はロシア人移民やロシアの影響力拡大が東北アジアにおよぼした影響について述べている。Mark Bassin[1999]は、極東ロシアの状況についてロシア人はどのようなイメージを持っていたのか考察している。

何萍[1995、1998]は、極東ロシアでの中国人労働者の状況、中国人社会の様相について考察している。張宗海[2007、2008]、常勝(B.扎采平)[2007]も中国人移民の動向について述べている。中国人移民はしばしばロシア側から排斥されたので、それに抵抗を示すこともあった。こうした点については、張本政[1979、1980a、1980b]、劉家磊[1980]が考察している。董万倫[1984]は、19世紀後半にウスリー川流域に居た「東海恰喀拉人」が清朝の領域に移動してきたことについて検討を加えた。

アイグン条約によりアムール川左岸はロシア領になったが、条約締結後すぐにロシアの支配がおよび、清朝の影響力が消滅したわけではなかった。劉邦厚[1980]は、アイグン条約締結後も清朝は左岸方面の巡察をしていたことについて考察している。左岸を開墾した「清朝人」がいたことから、ロシアとの間にトラブルがあったことは、和田清[1942]、張本政[1982]、郭燕順[1983]、劉邦厚[1985]が検討している。葉高樹[1995]はアムール川流域での露清間のトラブルについて、呂一燃[1994a]は1896-1908年におこなわれた拉哈蘇蘇の税関をめぐる露清交渉について档案を使って考察している。

1891年のウスリー鉄道の建設により、東北アジアは鉄道の時代に突入した。デヴィッド・ウルフ[1994]はウスリー鉄道の建設が始まると、都市人口や満洲との国境交易が増加し、極東ロシアの経

済開発はマンチュリアとの経済的、人的依存関係を深めたことを主張した。マンチュリアと極東ロシアとの貿易については、張鳳鳴[1987、1994、2002、2003a、2003b、2006]が精力的に考察している。また、郭蘊深[1985、1987]、韓来興[1989]、祁学俊[1991]、王英利[2002]、費馳[2009]による研究もある。

日清戦争後、清朝はロシアとの間に露清同盟を結び、ロシアと提携して日本に対抗する方針を打ち出した。この点については、佐々木揚[1977]の研究が優れている。また佐々木揚[1979]も必読の研究史の整理である。中俄密約について中国語論文では、李玄伯[1950、1962]、周傳儒[1985]、劉存寬[1987]、王宗遠[2007]がある。

中東鉄道については麻田雅文[2012]が刊行され、ロシア語史料に基づき鉄道の経営状況を明らかにした。この研究により、戦前の満鉄調査書などに依拠して中東鉄道の状況を述べることは過去となった。麻田雅文はロシア語の史料、研究書については詳しいが、中国語文献については網羅的には検討していない。以下では中国語文献を中心に述べてみたい。

馬蔚雲[2010]は中東鉄道の建設から、1950年にソ連から返還されまでの経緯について概述している。李濟棠[1989]は、主に中国側史料に基づき、中東鉄道の契約が結ばれ、建設が始まるまでの経過について考察している。呉文衡[1993]も中国語史料を中心に考察している。鉄道建設をめぐる交渉については葛風花[1981]、朱從兵[1998]が、鉄道建設への抵抗については劉家磊[1982]、呉文衡[2009]が検討している。初代総弁であった許景澄については、陳志明[1987]がその経歴についてまとめている。中東鉄道を通しておこなわれた貿易については、郭蘊深[1991]が考察している。経営動向については、徐日彪[1994]が分析している。制度的な側面については、石岩[1997]、段光達[2001]、郭海霞[2009]が検討している。中国側と中東鉄道がどのような交渉をしていたのかは、現在でも十分には明らかにはなっていない。喬治忠[2007]は徐世昌を中心とした交渉について述べている。李朋[2010]は、吉林省、黒龍江省が設置していた鉄路交渉局の動向について考察している。

中東鉄道の建設、運営に深くかかわったウィッテのマンチュリアに対する政策、志向については

菅原崇光[1966]、呉士英[1988]が検討している。ロシアによる旅順、大連経営については、政史系歴史教研究室[1978]、邸富生[1979]が述べている。

史料集としては、佐々木揚[1993]はロシア語史料の翻訳をしており大変有用である。吉林省社会科学院歴史研究所編[1980-82]は、1900-01年にかけてロシア軍が中国でおこなった軍事行動に関するロシア語史料の邦訳をしている。

第2章 朝鮮との関係

マンチュリアをめぐる清朝と朝鮮との関係については、概説ではないが李花子[2006]が概略的な事実について述べている。研究史の整理については、必ずしもマンチュリアと朝鮮との関係をあつかった論文だけを紹介しているわけではないが、陳尚勝[2009]がまとめた整理をしている。

①境界地帯をめぐる問題

境界地帯をめぐる清朝と朝鮮との間でおこなわれた交渉に関する研究論文は、秋月望[2010]が整理している。17～18世紀にかけての交渉について、戦前では内藤湖南[1972]、篠田治策[1938]、麻生武亀[1938]が考察している。中国では多くの研究成果が出されている。楊昭全[1993]は、古代から清末までをあつかっているが叙述の中心は清代である。李花子[2011]は、明清時代の中朝境界史についてまとめている。陳慧[2011]は、清代の中朝境界史研究の到達点を示しているすぐれた研究である。

康熙年間に設置された穆克登碑の設置は、中朝境界史のなかでは重要なテーマのため、多くの論文が出されている。楊昭全[1981]、張存武[1981]、徐徳源[1996、1997]、刁書仁[2003]、李花子[2008、2011]、陳慧[2009a、2009b、2010]、倪屹[2012]、馬孟龍[2009]らによる研究がおこなわれている。国境交渉などについては、張存武[1971、1972、1985]、崇実[1993]、陶勉[1996]、姜龍範[1998a]が検討している。文純實[2002]は白頭山の定界碑について朝鮮の人々がどのように考えていたのかについて分析している。

19世紀になると清朝と朝鮮の間では、再び国境についての交渉がおこなわれた。19世紀の交渉については、戦前では小藤文次郎[1905]、幣原坦[1909]が検討している。最近刊行された名和悦子

[2012]は、内藤湖南の中朝国境認識について分析している。秋月望[1989]は、朝鮮側が豆満江北岸の領有権を主張した背景とその論理について、秋月望[2002]では1880年代以降の朝鮮側の主張について考察している。中国では任熙俊[1995]、蔡建[2004]、趙興元[2001]、衣保中[2009]が検討している。

19世紀後半にロシアの勢力が拡大したことから、朝鮮はロシアと国境を接することになった。韓俊光[1987]は、ロシアと朝鮮の国境付近の状況について概説している。秋月望[1991]はロシアと朝鮮との間に国境が成立したことに対して、朝鮮がどのように対応したのか考察している。張存武[1991]はロシアと朝鮮の関係変化が中朝関係におよぼした影響について、潘曉偉[2011a、2011b]はロシア領に移住した朝鮮人の動向について検討している。

張杰[2008]は朝鮮使節の荷物をどのように輸送していたのかについて、王燕杰[2011]は越境朝鮮人が鳳凰城士兵を殺した事件を題材に、清朝と朝鮮の間でおこなわれていた裁判について考察している。李細珠[2011]は、日韓併合が東三省地方政府の首脳たちに与えた衝撃、対応策について検討している。

②朝鮮人移民

朝鮮人移民については、孫春日[2009]、孫泓[2005]が概略についてまとめており、張洪岩[2011]はその流入状況について考察している。朝鮮人移民に対する清朝の対応については、姜龍範[1998b、2000a]、李花子[2004]、寺坂誠記[2008]が分析している。19世紀後半以降については、田川孝三[1944、1981]の研究がまとまっている。また、水野明[2003]、田志和[1990]、孫春日[2001、2002a]、趙興元[2003、2006a、2009]、楊俊峰[2004]、張士尊[2007]が検討している。

朝鮮人移民が移住した鴨緑江流域の状況については、秋月望[1983]、張士尊[2005]、李花子[2005]、廉松心[2009、2010、2011]が述べている。山本進[2010、2011]は、近年の研究成果を消化するとともに、新たに刊行された史料の分析を通じて鴨緑江流域の開墾状況について考察している。朝鮮人移民が地域開発に貢献した点を指摘したものには、呂光天[1957]、方衍[1990]がある。朴吉春[1989]

は、『東三省政略』が朝鮮人の清朝籍取得についてどう記述しているか述べている。

移住後の動向については、高永一[1986]が清代から1920年までの状況について概述している。朴昌昱[1995]は、清代から満洲国期までの在満朝鮮人について著者が書いてきた論文を集めており、在満朝鮮人の概況について知ることができる。鶴島雪嶺[1997]は現代の状況についても述べているが、概略を知るにあたっては参照の価値はある。楊昭全[2007]は必ずしも在満朝鮮だけを対象にしてはいないが、参考になる記述は多い。

③交易関係

清朝と朝鮮は豆満江、鴨緑江を境界とした陸上交易をおこなっていた。戦前では鶴見立吉[1926]が検討している。張存武[1978]は清初から19世紀末までの交易動向を明らかにしており、まず参照すべき研究である。全般的な交易状況については、朴京才[2006]、費馳[2006、2007]、趙興元[2006b、2006c]、李宗勛[2007]が考察している。会寧・慶源開市については、寺内威太郎[1983、1985、1998、1999a、1999b、2001]が精力的に研究している。中国では郭慶涛[1997]が考察している。延辺などの間島を通じての交易については、鶴島雪嶺[2000]、王臻[1999]、費馳[2010]、李曉光[2011]が、交易の動向について述べている。鴨緑江近隣でおこなわれた交易については、寺内威太郎[1986、1992]、陶勉[1987]、王臻[2002]が検討している。

日本の勢力が朝鮮に拡大するに伴い、朝鮮北部から日本へ至る貿易経路が注目され、日本はその拡充を模索していた。この点については、鈴木武雄[1938]、西重信[1995]が考察している。19世紀後半に会寧・慶源開市などの辺市は廃止され、新たに貿易章程が締結された経緯については、秋月望[1985]が考察している。張杰[2010]は入関前後の寧古塔、吉林烏喇、琿春と朝鮮との交易について、楊軍[2010]は中朝交易における攪頭の役割について述べている。

④間島問題および史料

間島に移住した朝鮮人は多く、清朝も朝鮮人移民に配慮した対応をしていた。その一方で日本の影響力が間島にも伸張したので、間島の状況は複雑化した。戦前では天野元之助[1931]、百瀬弘

[1934]が間島をめぐる状況について述べている。日本、清朝、朝鮮の三者の思惑が交錯する状況を分析した研究としては李盛煥[1991]があり、清代以降の間島をめぐる日中朝の関係についてすぐれた考察をしている。金春善[2001]は、19世紀から1915年の「南満東蒙条約」までの延辺における朝鮮人の状況について検討している。白榮勛[2005]は、間島協約(1909年)の交渉過程を考証し、さらには間島協約がその後の在満朝鮮人にどのような影響をおよぼしたのかを、日本側、中国側の史料の双方を使って立論している。間島の朝鮮人の状況については、小林玲子[2005、2007、2008、2010]が精力的な研究をおこなっている。また、鶴島雪嶺[1979]、寺坂誠記[2004]、姜龍範[2000b]も検討している。李洪錫[2002]は日清戦争時の延辺の朝鮮人の動向について述べている。1907～10年に呉録貞が間島でおこなった改革については、徐風晨[1983]、吳忠亜[1984]、靳大経[1991]が検討している。

間島への日本の勢力拡大については西重信[1978、1987]、高興民[1987]、姜龍範[1999a、1999b]が考察している。日露戦争後の日本と清朝との間の交渉について、日本では林正和[1960]、野村乙二郎[1973]、森山茂徳[1985]、盧啓鉉[1987]、谷川雄一郎[2000]による研究がおこなわれている。中国では韓香蘭[2000]、孫春日[2002b]、衣保中[2005]、李澤昊[2007]、蘇久青[2008]が検討している。姜龍範[2001]は、間島の朝鮮人に日中両国が領事裁判権をどのように行使したのか分析している。松本英紀[1980]は宋教仁と間島とのかかわりについて、鶴島雪嶺[2000]は日本人、朝鮮人の間島観について述べている。

史料について、中国第一歴史檔案館編[1996]は中朝関係に関する光緒年間の檔案を収録している。この続編として中国第一歴史檔案館編[1998]が刊行され、乾隆、嘉慶、道光、咸豐、同治、宣統年間の檔案を収録している。吉林省檔案館[2000]は、1871年(同治10年)から1911年(宣統3年)の間に吉林將軍が関わった案件についての檔案を編集している。吉林省檔案館[1999]は、敦化方面に移住してきた朝鮮人についての檔案を活字化している。吉林師範學院古籍研究所[1995]は、『清史録』から中朝関係の記事を抽出している。刁書仁[1996]は中朝関係の地理書を集めており、楊昭全[1994]は

中朝国境に関する史料を編集している。高永一[1989]は、明清時代における朝鮮人の流入、定着後の状況についての史料を集めている。張杰[2009]が所収する朝鮮側が作成した史料も、朝鮮との関係を考察するさいには有用である。

文献リスト 日本語

秋月望

- 1983「鴨緑江北岸の統巡会哨について」『九州大学東洋史論集』11 pp. 117-137
 1985「朝中間の3貿易章程の締結経緯」『朝鮮学報』115 pp. 103-137
 1989「中朝勘界交渉の発端と展開」『朝鮮学報』132 pp. 79-108
 1991「朝露国境の成立と朝鮮の対応」『国際学研究(明治学院大学)』8 pp. 23-37
 2002「朝清境界問題にみられた朝鮮の『領域観』—『勘界会談』後から日露戦争期まで—」『朝鮮史研究会論文集』40 pp. 125-149
 2010「華夷秩序の境界から国際法的な“国境”へ—朝鮮と清の境界地帯をめぐる研究史—」『研究所年報(明治学院大学国際学部附属研究所)』13 pp. 3-9

麻田雅文

- 2012『中東鉄道経営史 ロシアと「満洲」1896-1935』名古屋大学出版会 479p

麻生武亀

- 1938「李朝時代の西北領界と鴨緑江」『稲葉博士還暦記念満鮮史論叢』pp. 23-60

阿南惟敬

- 1964「清初の黒龍江における露清衝突に関する素描(上)—順治年間の衝突について—」『防衛大学校紀要(人文・社会科学編)』9 pp. 1-22
 →『清初軍事史論考』甲陽書房、1980 pp. 110-130
 1965「清初の黒龍江における露清衝突に関する素描(下)—康熙年間の衝突について—」『防衛大学校紀要(人文・社会科学編)』10 pp. 141-169
 →『清初軍事史論考』甲陽書房、1980 pp. 131-157

天野尚樹

- 2001「国境概念の比較検討—露中国境概念の蝕変—」『国際学論集(上智大学)』48 pp. 57-76

天野元之助

- 1931『間島に於ける朝鮮人問題に就いて』中日文化協会 88p

イゴリ R. サヴェリエフ

- 2005『移民と国家 極東ロシアにおける中国人、朝鮮人、日本人移民』御茶の水書房 323p

稲葉岩吉

- 1934「朝鮮孝宗朝に於ける兩次の満洲出兵に就いて(上、下)」『青丘学叢』15、16 pp. 1-28、pp. 47-60

入江啓四郎

- 1967「ネルチンスク条約の研究」アジア・アフリカ国際関係研究会編『中国をめぐる国境紛争』巖南堂書店 pp. 1-45

岩間徹

- 1941『露国極東政策とウィッテ』博文館 284p

大橋與一

- 1974『帝政ロシアのシベリア開発と東方進出過程』東海大学出版会 689p

大畑篤四郎

- 1967「解説」『中国めぐる国境紛争』巖南堂書店 pp. 175-199

楠木賢道

- 1996「黒龍江將軍衙門档案からみた康熙23年の露清関係」『歴史人類』24 pp. 29-117

小藤文次郎

- 1905「韓満境界私考」『東洋学術雑誌』22巻290号、291号 pp. 455-462、pp. 500-523

小林玲子

- 2005「韓国併合前後における間島居住朝鮮人の法的地位と帰化政策」『朝鮮学報』197 pp. 45-82
 2007「統監府・朝鮮総督府による間島および豆満江における取締と警備体制—1907年～1910年を中心に—」『一橋社会科学』3 pp. 175-204
 2008「韓国併合後の間島における朝鮮民族独立運動に対する日本の取締」『朝鮮学報』209 pp. 35-82
 2010「大韓帝国期に設置された辺界警務署の役割について」『韓国研究センター年報』10 pp. 17-49

佐々木揚

- 1977「日清戦争後の清国の対露政策—1896年の露清同盟条約の成立をめぐる—」『東洋学報』59-1・2 pp. 67-104

1979「近代露清関係史の研究についてー日清戦争期を中心としてー」『近代中国研究』5 pp. 57-82

1993『19世紀末におけるロシアと中国』
東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 364p

サツヴィン

1935川田秀雄訳『近世露満蒙関係史』福田書房 326p

幣原坦

1909「間島国境問題」『東洋協会調査部学術報告』1 pp. 207-236

篠田治策

1938『白頭山定界碑』楽浪書院 342p

下田禮佐

1930「露清関係の研究」『史学地理論叢ー小川博士還暦記念』弘文堂書店 pp. 403-452

承志

2007「満洲語で記された『黒龍江流域図』」『大地の肖像 絵図・地図が語る世界』京都大学学術出版会 pp. 193-222
→『ダイチン・グルンとその時代ー帝国の形成と八旗社会ー』pp. 154-196

2009「描かれる版図ー黒龍江流域の国境探検ー」『ダイチン・グルンとその時代ー帝国の形成と八旗社会ー』名古屋大学出版会 pp. 197-244

菅原崇光

1966「ウィッテの初期満州植民地化事業の性格とその階級構造(1, 2)」『史学』39-1、39-2 pp. 67-90、pp. 87-104

鈴木武雄

1938「北鮮ルート論」『朝鮮経済の研究』3 岩波書店 pp. 321-362

田川孝三

1944「近代北鮮農村社会と流民問題」朝鮮総督府朝鮮史編輯会編『近代朝鮮史』pp. 407-625
1981「光緒初年朝鮮越境流民問題」『論集近代中国研究 市古教授退官記念論叢』山川出版社 pp. 213-232

鶴島雪嶺

2000「清末、民国初期の間島の貿易」『豆満江地域開発』関西大学出版会 pp. 150-176

寺坂誠記

2004「墾民教育会による帰化と独立ー1910年代前半の間島朝鮮人の政治意識」『鶴山論叢』4

pp. 1-16

2008「20世紀初頭における韓国の間島進出と中国の対応」『現代中国研究』22 pp. 1-19

谷川雄一郎

2000「間島協約締結過程の再検討」『文学研究論集(明治大学大学院文学研究科)』14 pp. 169-186

塚瀬佳

2012「清代マンチュリアの諸民族に関する研究動向」『News Letter(近現代東北アジア地域史研究会)』24 pp. 21-37

2013「清代マンチュリア史に関する研究史の整理ー清代前半を中心にー」『News Letter(近現代東北アジア地域史研究会)』25 pp. 29-37

鶴島雪嶺

1979「韓国統監府臨時間島派出所の報告書を通してみた間島の朝鮮人農民」『甲南経済学論集』19-4 pp. 32-51

2000「日本人と朝鮮人の間島観」『豆満江地域開発』関西大学出版会 pp. 199-304

1997『中国朝鮮族の研究』関西大学出版会 419p

鶴見立吉

1926「会寧開市に就て」『朝鮮史学』4、5 pp. 19-24 pp. 20-24

寺内威太郎

1983「李氏朝鮮と清朝との辺市についてー会寧・慶源開市を中心としてー(1)(2)」『駿台史学』58、59 pp. 1-24、pp. 35-51

1985「慶源開市と琿春」『東方学』70 pp. 76-90

1986「義州中江開市について」『駿台史学』66 pp. 120-144

1992「柵門後市と湾商」『清朝と東アジア 神田信夫先生古稀記念論集』山川出版社 pp. 381-401
1998「近世における朝鮮北境と中国ー咸鏡道の国境交易を中心に」『朝鮮史研究会論文集』36 pp. 117-144

1999a「初期の会寧開市」『駿台史学』108 pp. 1-20

1999b「朝鮮北境の国境交易と民衆」『駿台史学』106 pp. 1-22

2001「近世における朝鮮北部地域と中国東北地方との政治経済関係に関する研究」『明治大学人文科学研究所紀要』48 pp. 279-293

デヴィッド・ウルフ

1994「シベリア・北満をめぐる中国とロシア」『ア

ジアから考える3 周縁からの歴史』東京大学
出版会 pp. 15-46

内藤湖南

1972『韓国東北疆界攷略』『内藤湖南全集』第6巻、
筑摩書房 pp. 509-572 (1907年ごろの脱稿)

内藤智秀

1942花岡止郎、栗原健、村上正二『ロシアの東方
政策』目黒書店 315p

名和悦子

2012『内藤湖南の国境領土論再考 20世紀初頭の
清韓国境問題「間島問題」を通して』汲古書院
458p

西重信

1978鶴島雪嶺「朝鮮人の間島入植と日本の朝鮮政
策」『関西大学部落問題研究室紀要』4 pp. 1-88
1987『北朝鮮ルート論』と朝鮮人の間島移住
『経済論集 (関西大学)』37-4 pp. 131-162
1995「北朝鮮ルート論の系譜 (1、2)」『経済論集
(関西大学)』45-4、45-5 pp. 111-144、
pp. 153-602

野見山温

1959「満文ネルチンスク条約の研究」『福岡大学創
立25周年記念論文集』1959
→『露清外交の研究』酒井書店、1977 pp. 1-36
1977「露清両国初期接触地名考」『露清外交の研究』
酒井書店 pp. 345-352

野村乙二朗

1973「明治末期清韓国境画定交渉の一考察—いわ
ゆる間島問題に関する序論—」『政治経済史学』
85 →『近代日本政治外交史の研究』刀水書房、
1982

白榮勲

2005『東アジア政治・外交史研究 間島協約と裁
判管轄権』大阪経済法科大学出版部 304p

塙作楽

1940「露西亜帝国の極東進出(1、2)」『歴史学研
究』10-9、10-10 pp. 2-31、pp. 33-73

林正和

1960「間島問題に関する日清交渉の経緯」『駿台史
学』10 pp. 181-199

坂野正高

1959「北京における対露交渉機構の変貌—天津条
約(1858年)調印から1860年5月まで—」『近代中
国研究』3 pp. 2-67

藤本幸夫

1991『『北征録』について』畑中幸子・原山煌編
『東北アジアの歴史と社会』名古屋大学出版会
pp. 73-106

文純實

2002「白頭山定界碑と一八世紀朝鮮の疆域観」
『朝鮮史研究会論文集』40 pp. 39-66

ベ・ア・ロマノフ

1934a山下義雄訳『満洲に於ける露国の利権外交史』
鴨右堂書房 830p 原書房、1973復刻
1934bロシア問題研究所訳『露西亜帝国満洲侵略史』
ナウカ社 612p

朴京才

2006「明末清初の互市貿易をめぐる中朝関係の史
的考察—中江・北関開市を中心として—」『現代
社会文化研究』37 pp. 115-127

増田忠雄

1937「満洲東部国境の地域的考察」『研究要報 (満
鉄教育研究所)』11 pp. 1-54
1939「満洲東部国境の諸問題」『満鉄調査月報』14-3
pp. 109-157
1941a「ネルチンスク条約の国境に就て」『史林』
26-1 pp. 52-68
1941b「満洲西北境に於ける露支考証—交通路と国
境—」『満鉄調査月報』21-1 pp. 53-100
1941c「満洲国境問題」中央公論社 133p

松浦茂

1997「ネルチンスク条約直後清朝のアムール川左
岸調査」『史林』80-5 pp. 76-106
→『清朝のアムール政策と少数民族』pp. 4-40
2001「1709年イエズス会士レジスの沿海地方調査」
『史林』84-3 pp. 77-108
→『清朝のアムール政策と少数民族』pp. 41-82
2006『清朝のアムール政策と少数民族』京都大学
学術出版会 530p

松本英紀

1980「宋教仁と間島問題」『立命館文学』418・419・
420・421 pp. 425-464

満鉄弘報課編

1942「ネヴェリスコイのアムール開拓記」『東鞆紀
行』満洲日日新聞社 pp. 285-400

水野明

2003「東三省(満州)における朝鮮人流入について」
『愛知学院大学教養部紀要』51-1 pp. 165-182

宮崎正義

1922『近代露支関係の研究 沿黒龍江之部』満鉄社長室調査課 400p

百瀬弘

1934「間島地方の史的考察—近世朝支関係を中心に—」『東亜』7-8 pp. 109-118

森山茂徳

1985「日韓併合の国際関係—朝鮮問題と満州問題の連関」『年報・近代日本研究』7 pp. 69-94
→『近代日韓関係史研究』東京大学出版会、1987 pp. 227-249

柳沢明

2010「ロシアの東漸と東アジア—一九世紀後半における露清関係の転換」『岩波講座東アジア近現代通史』1、岩波書店 pp. 80-103

矢野仁一

1944「清代満洲を繞るロシアとの国境問題交渉」『清朝末史研究』大和書院 pp. 171-259
→『中国をめぐる国境紛争—アジア・アフリカ国際関係史叢書2』巖南堂書店、1967 pp. 47-105 (語句を修正して再録)。

山添博史

2003「ムラヴィヨフの対中対日外交：アムー川流域と樺太」『社会システム研究』6 pp. 195-204

山本進

2010「清末民国期鴨緑江流域の開墾」『九州大学東洋史論集』38 pp. 141-159
2011「清代鴨緑江流域の開墾と国境管理」『九州大学東洋史論集』39 pp. 145-176

吉田金一

1969「清初におけるロシア人捕虜について」『軍事史学』5-2 pp. 31-43
1978「初期の露清関係史の資料について」『近代中国』3 pp. 110-132
1980「郎談の『吉林九河図』とネルチンスク条約」『東洋学報』62-1・2 pp. 31-70
1981「ネルチンスクにおける露清講和会議の経過について—ゴロヴィーン報告書の問題点」『論集近代中国研究 市古教授退官記念論叢』山川出版社 pp. 555-580
1983「ネルチンスク条約で定めた清とロシアの国境について」『東洋史研究』42-1 pp. 62-87
1974『近代露清関係史』近藤出版社 274p
1984『ロシアの東方進出とネルチンスク条約』

近代中国研究センター 509p

1992『ロシアと中国の東部国境をめぐる諸問題』環翠堂 242p

李盛煥

1991『近代東アジアの政治力学—間島をめぐる日中朝関係の史的展開—』錦正社 494p

盧啓鉉

1987「間島協約に関する外交史的考察」『韓』106 pp. 145-181

若松 寛

1973-74「ガンチムールのロシア亡命事件をめぐる清・ロシア交渉(上、下)」『京都府立大学学術報告・人文』25、26 pp. 25-39 pp. 1-12

和田清

1942「江東六十四屯」の問題について」『東亜史論叢』生活社 pp. 380-420

文献リスト 中国語**衣保中**

2005「間島問題の歴史真相及中日交渉の歴史経験」『史学月刊』7 pp. 70-75
2009「《図們江中韓界務條款》的簽訂及其对边疆形成的影響」『東北边疆歴史与文化研究』吉林人民出版社 pp. 133-149

閻崇年

1978「論雅克薩之戰」『北京師範大学学報』5 pp. 73-79
→『燕歩集』北京燕山出版社、1989 pp. 253-270

延辺歴史研究所編

1987「吉林省中蘇(俄)辺界簡史」『中国朝鮮族歴史研究論叢』延辺大学出版社 pp. 1-44

王英利

2002「清代黒龍江中俄経貿若干問題探要」『北方論叢』2 pp. 114-117

王燕杰

2011「試論乾隆二十九年的盛京会審—兼論盛京会審与鳳凰城会審的差異—」『社会科学輯刊』4 pp. 146-151

王奇

2003『俄国東部移民開發問題研究(1861-1917)』中国社会科学出版社 300p
2008『中俄国界東段學術史研究』中央編訳出版社 176p

王臻

1999「清朝对李朝図們江地区的边境貿易簡論」
『東疆學刊』4 pp. 33-37

2002「清朝与朝鮮在鴨綠江地区的边境貿易述論」
『延邊大學學報(社会科学版)』3 pp. 105-107

王宗遠

2007「論“聯俄制日”外交的形成及其对《中俄密約》的影響」『西伯利亞研究』4 pp. 64-68

王兆明

1993韓嬪娜「図們江口の国界和国土問題」『東疆研究論集』吉林文史出版社 pp. 240-250

王寧

1986「吳大澂琿春勘界簡論」『東北地方史研究』1986-2 pp. 38-43

王麗恒

2001「沙俄的遠東移民政策」『北方文物』1 pp. 99-103

何萍

1995「俄国遠東地区華工問題之初探」『海外華人研究』3 pp. 77-124

1998「1860-1880年代俄国遠東地区的華人社会」
『台灣師範大學歷史學報』26 pp. 235-257

解立紅

1992「論康熙帝北部边防的軍事戰略」『清史研究』3 pp. 33-40

郭濶深

1985郭濶深・馬越山翻譯 季米特里・包茲特涅耶夫編「十九世紀俄国同中国東北地区的边境貿易」
『黑河學刊』4 pp. 29, 87-98

1987「中俄環璦貿易」『黑河學刊』4 pp. 1-7

1991「中東鐵路与中俄經濟貿易關係」『北方文物』2 pp. 78-84, 97

郭燕順

1983「清代江左旗屯所在地区居民和村屯的變化」
『黑龍江文物叢刊』3 pp. 26-32

郭海霞

2009「東省特別区域法院訴訟制度研究」『北方文物』4 pp. 97-101

郭慶濤

1997「試論17世紀中葉至18世紀清朝与朝鮮的会源辺市貿易」『韓國學論文集』6 pp. 42-62

郝建恒

1989侯育成、陳本裁編訳『歷史文獻補編—17世紀中俄關係文獻選訳』商務印書館 400p

葛風花

1981「沙俄与中東路」『河北師範大學學報』4 pp. 63-72

閔克笑

1985「清代吉林地区卡倫概述」『歷史檔案』4 p. 78-82

韓香蘭

2000「論清代中朝邊務糾紛与“間島案”問題」
『洛陽師範學院學報』1 pp. 114-118

韓俊光

1987田象程「吉林省中蘇(俄)边界簡史」『中国朝鮮族歷史研究論叢』延邊大學出版社 pp. 1-44

閔大虹

1994「“雅克薩之戰”中的抗俄將領郎坦」『東北師範大學學報(哲学社会科学版)』1 pp. 22-24

韓狄

2001「呼倫貝爾边界界務交涉始末」『內蒙古社会科学』4 pp. 67-68

韓来興

1988「璦琿條約的簽訂和奕山的歷史責任」『黑河學刊』2 pp. 45, 69-74

1989「《璦琿條約》確定了中俄黑龍江边境貿易的合法性」『黑河學刊』3 pp. 41-57

祁學俊

1991「清民時期黑河与海蘭泡之間的中俄(蘇)貿易」呂一燃主編『中国边疆史地論集』黑龍江教育出版社 pp. 303-320

吉林師範學院古籍研究所

1995『清實錄中朝關係史料摘編』吉林文史出版社 405p

吉林省社会科学院歷史研究所編

1980-82『1900—1901年俄国在華軍事行動資料』3冊 齊魯書社出版

吉林省档案館

1999「光緒年間吉林敦化朝鮮僑民史料」『歷史檔案』3 pp. 63-67

2000中国边疆史地研究中心『清代中朝關係史料選輯 吉林省档案館藏』吉林人民出版社 378p

姜濤

1992「清代中国北部沿边卡倫設置及沿边卡倫路」『北方文物』4 pp. 80-83

喬治忠

2007李沢昊「徐世昌与中俄鐵路“自治会”交涉」
『北華大學學報(社会科学版)』6 pp. 22-26

姜長斌

2007『中俄国界東段的演變』中央文獻出版社 489p

姜龍範

1998a「關於清季中朝邊務交涉的研究」『延邊大學學報(社會科學版)』1 pp. 50-54

1998b「清政府對朝鮮移民的政策」『延邊大學學報(社會科學版)』2 pp. 63-67

1999a「日本介入“間島問題”的戰略構想探討」『延邊大學學報(社會科學版)』1 pp. 40-45

1999b「日本對間島朝鮮人的保護政策」『延邊大學學報(社會科學版)』2 pp. 70-75

2000a「清政府移民實邊政策與中國朝鮮族的形成」『社會科學戰線』4 pp. 187-193

2001「中、日圍繞間島朝鮮人領事裁判權的矛盾對立」『延邊大學學報(社會科學版)』1 pp. 88-92

2000b『近代中朝日三國對間島朝鮮人的政策研究』黑龍江朝鮮民族出版 326p

金春善

2001『延邊地區朝鮮族社會的形成研究』吉林人民出版社 325p

金鑫

2009「第一次雅克薩之戰清軍所得人口考」『史林』6 pp. 73-77

靳大經

1991「吳錄貞經略延邊的歷史功績」『社會科學戰線』3 pp. 224-229

倪屹

2012「穆克登碑原址考證」『北方文物』2 pp. 84-89

胡宝林

1985「試論清代黑龍江邊防」『北方論叢』5 pp. 41-46, 63

吳士英

1988「義和團時期維特·阿列克謝耶夫在侵略我國東北問題上的表演」『黑河學刊』4 pp. 59-66

吳雪娟

2009「郎談《九路圖》與“九路”巡邊考」『歷史檔案』1 pp. 56-63

吳忠璽

1984「吳錄貞與所謂“間島”問題」『社會科學戰線』3 pp. 183-192

吳文衡

1980「清代前期呼倫貝爾的邊防問題」『北方論叢』1
→『東北歷史地理論著匯編』5、吉林人民出版社

社、1986 pp. 85-89

1982李士良「清代官員巡查東北邊境的記錄」『東北考古與歷史』1 pp. 53-64

2009「東北人民反對沙俄修建中東鐵路的鬭爭」『世紀橋』9 pp. 36-40

1993張秀蘭『霍爾瓦特與中東鐵道』吉林文史出版社 304p

高永一

1986『中國朝鮮族歷史研究』延邊教育出版社 283p

1989『朝鮮族歷史研究參考資料匯編』延邊大學出版社 459p

孔艷波

2008「穆拉維約夫武裝侵華與清朝東北邊防」『北方史地』2008-3 pp. 71-74

高興民

1987李鐘官「日本駐間島總領事館及其所屬機構的沿革簡述」『中國朝鮮族歷史研究論叢』延邊大學出版社 pp. 139-155

蔡建

2004「中朝邊界爭執與《圖們江中韓界務條款》」『韓國研究論叢』pp. 186-201

朱從兵

1998「李鴻章與中東路權」『徐州師範大學學報(哲學社會科學版)』1 pp. 72-76

周喜峰

2007「清朝前期黑龍江各民族與東北邊疆防衛」『清史論叢』pp. 395-401

周傳儒

1985「李鴻章環游世界與一八九六年中俄密約(上、下)」『史學月刊』1、2 pp. 82-89、pp. 47-53

宿豐林

2011「關於中俄東段邊界形成史問題的再檢討」『俄羅斯學刊』3 pp. 58-65

徐景學

1980「淺論清代東北邊疆的管理」『學習與探索』1 pp. 136-142

徐昌漢

1983「十九世紀下半葉沙俄對黑龍江以北、烏蘇里江以東地區的殖民」『求是學刊』5 pp. 100-104

徐德源

1996「長白山東南地區石堆土堆築設的真相」『中國邊疆史地研究』2 pp. 62-70

1997「穆克登碑的性質及其鑿立地點與位移述考」『中國邊疆史地研究』1 pp. 70-79

徐日彪

1994「試論俄国在華投資与東省鐵路財政」『近代史研究』2 pp. 111-132

徐風晨

1983「吳錄貞与延吉邊務交涉」『東北師大學報(哲学社会科学版)』1 pp. 77-83

徐立亭

1999「《尼布楚條約》前後的東北防務」『北方文物』3 pp. 68-75

蒋廷黻

1932「最近三百年東北外患史(從順治到咸豐)」『清華學報』8-1、1932 pp. 1-70
→『中国近代史研究』里仁書局、1980 pp. 88-137

常勝(B. 扎采平)

2007「華人対俄羅斯遠東城市發展的貢獻」『西伯利亞研究』4 pp. 59-63
2008「俄国対黒龍江疆疆的殖民化」『北大史學』13 pp. 215-233

崇実

1993「歷史上以図們江為東段邊界的考察」『社会科学戦線』6 pp. 203-212

政史系歴史教研室

1978「沙俄侵占旅大的七年」『遼寧師院學院』2 pp. 35-52

石岩

1997孫広梅「中東鐵路管理局的機構設置及其性質」『北方文物』1 pp. 85, 88-90

薛衡天

1991「試論俄国外阿穆爾軍区的形成与瓦解及其対中国東北邊局的影響」呂一燃主編『中国边疆史地論集』黒龍江教育出版社 pp. 402-431

蘇久青

2008「陳昭常与“間島”交涉」『北華大學學報(社会科学版)』3 pp. 51-55

孫泓

2005「朝鮮半島向中国大陸移民的歷史」『登州港与中韓交流國際學術討論會論文集』山東大學出版社 pp. 564-593

孫秀仁

1979張柏「清初寧古塔將軍的設置和抗俄鬭爭」『學習与探索』4 pp. 130-139

孫春日

2001「清季東疆的經營与朝鮮邊民的冒禁遷入」『韓國學論書』9 pp. 244-258

2002a「論清政府対犯禁朝鮮墾民的土地政策」『滿族研究』3 pp. 33-40

2002b「清末中朝日“間島問題”交涉之原委」『中国边疆史地研究』4 pp. 48-58

2009『中国朝鮮族移民史』中華書局 733p

段光達

2001「旅大租借地与中東鐵路属地沙俄殖民統治機構比較研究」『北方文物』2 pp. 93-97

中国社会科学院近代史研究所

1978a『沙俄侵華史』1 人民出版社 331p

1978b『沙俄侵華史』2 人民出版社 294p

1981『沙俄侵華史』3 人民出版社 1981 420p

1990a『沙俄侵華史』4上 人民出版社 1990 531p

1990b『沙俄侵華史』4下 人民出版社 1990 550p

中国第一歴史档案館編

1996『清代中朝關係档案資料匯編』國際文化出版公司 500p

1998『清代中朝關係档案史料統編』中国档案出版社 508p

張維華

1997孫西『清前期中俄關係』山東教育出版社 358p

張杰

2008「清代朝鮮使团与滿族雇車業述論」『滿族研究』1 pp. 35-40

2010「清前期吉林滿族与朝鮮邊境貿易述論」『中国边疆史地研究』4 pp. 57-67

2009『韓國史料三種与盛京滿族研究』遼寧民族出版社 384p

張洪岩

2011「19世紀以来中国朝鮮族人口遷移分布及聚居区形成研究」『地理科学』9 pp. 1077-1083

趙興元

2001「徐世昌与延吉邊務交涉」『中国边疆史地研究』3 pp. 54-60

2003「清政府対越境朝民的政策」『北華大學學報(社会科学版)』5 pp. 35-39

2006a「從“犯越”到墾居—19世紀60年代朝鮮邊民偷越図們江性質的變化」『東北史地』5 pp. 64-68

2006b「清代中朝之間的邊市貿易及影響」『北華大學學報(社会科学版)』3 pp. 29-34

2006c「清代中朝之間的經貿往来」『清代中朝關係

研究』吉林文史出版社 pp. 65-100

2009「清政府对図們江北的朝鮮移民的管理」『東北史地』3 pp. 41-46

張士尊

2005「清代中朝之間“甌脱”地帶人口与環境變遷考」『吉林師範大學學報(人文社会科学版)』3 pp. 92-94

2007「清末“韓民越界”与清朝“移民实边”」『學術交流』10 pp. 174-177

刁書仁

2003「康熙年間穆克登查邊定界考辨」『中国边疆史地研究』3 pp. 45-56

→『明清中朝日關係史研究』吉林文史出版社, 2001 pp. 242-264

1996『中朝相隣地区朝鮮地理志資料選編』吉林文史出版社 483p

張宗海

1988「穆拉維約夫与中俄璦琿條約」『黑河學刊』2 pp. 62-68

2007「俄国割占黑龍江、烏蘇里江地区後對華人暫時的寬容策略探析」『西伯利亞研究』5 pp. 56-59

2008「俄国割占黑龍江、烏蘇里江地区後當地華人商業的形成和發展」『西伯利亞研究』4 pp. 32-36

張存武

1971「清代中韓邊務問題探源」『中央研究院近代史研究所集刊』2 pp. 436-504

→『清代中韓關係論文集』pp. 178-246

1972「清韓陸防政策及其實施—清季中韓界務糾紛的再解—」『中央研究院近代史研究所集刊』3 下, 1972 pp. 497-518

→『清代中韓關係論文集』pp. 247-274

1981「穆克登所定的中韓國界」『中央研究院國際漢學會議論文集 歷史考古組』下

→『清代中韓關係論文集』pp. 275-303

1985「清季中韓關係之變通」『中央研究院近代史研究所集刊』14 pp. 105-125

→『清代中韓關係論文集』pp. 147-177

1978『清韓宗藩貿易 1637~1894』中央研究院近代史研究所 279p

1991「韓俄接觸与中韓關係 1862~1874」『中央研究院近代史研究所集刊』20 pp. 91-98

1987『清代中韓關係論文集』台灣商務印書館 418p

張丹卉

2008「清初雅克薩戰役之始末」『文化學刊』1 pp. 84-92

趙中學

1970『清季中俄東三省界務交涉』中央研究院近代史研究所 238p

趙文鐸

2001「康熙前期東北邊防思想探析」『北華大學學報(社会科学版)』1 pp. 56-58

張本政

1979「一八六八年青島淘金工起義」『社会科学戰線』1 pp. 167-176

1980a「試論近代中国人民第一次抗俄鬥爭—黑龍江上下游少數民族抗擊沙俄“考察隊”的光輝業績」『求是學刊』2 pp. 98-102

1980b「十九世紀八十年代沙俄在烏蘇里地区的排華暴行」『學習與探索』5 pp. 137-144

1982敬知本「江東六十四屯等地反對沙俄蚕食和迫害的鬥爭」『北方文物』2 pp. 25-30

1993「評一八八六年中俄勘界」『東疆研究論集』吉林文史出版社 pp. 218-235

張鳳鳴

1987「日俄戰後帝俄与中国東北北部的貿易」『求是學刊』3 pp. 89-96

1994「19世紀後半期黑龍江地区与俄国遠東地区的貿易」『學習與探索』1 pp. 124-130

2002「19世紀後半期俄国遠東地区对中国東北農畜產品的需求」『西伯利亞研究』4 pp. 40-42, 55

2003a「試論黑龍江地区与沙俄的貿易」『中国边疆史地研究』1 pp. 65-75

2006「20世紀初期中国東北農產品的對外輸出及其影響」『學習與探索』6 pp. 172-174

2003b『中国東北与俄国(蘇聯)經濟關係史』中国社会科学出版社 204p

趙鳴岐

1982「烏扎拉村考」『求是學刊』2 pp. 92-95

陳慧

2009a「清代穆克登碑初立位置及図們江正源考論」『清史研究』4 pp. 111-117

2009b「後世所見的穆克登碑」『朝鮮・韓國歷史研究』10 pp. 150-162

2010「穆克登碑後世位移考弁」『社会科学戰線』4 pp. 139-145

2011『穆克登碑問題研究—清代中朝図們江界務考

証』中央編訳出版社、2011 296p

陳志明

1987「中東鐵路公司首任總弁許景澄」『黒河学刊』
2・3 pp. 98-102

陳尚勝

2009「近16年来中国学术界關於清朝与朝鮮關係史
研究述評」『当代韓国』3 pp. 80-92

邱富生

1979「沙皇俄国对遼東半島的侵略」『遼寧師院学院』
1 pp. 56-60

田志和

1990「簡論清政府对朝鮮族的政策」『東北師大学報
(哲学社会科学版)』1 pp. 52-56

佟冬

1985『沙俄与東北』吉林文史出版社 671p

陶勉

1996「清代封祭長白山与派員踏查長白山」『中国辺
疆史地研究』3 pp. 66-84

1997「清韓中江貿易述略」『中国辺疆史地研究』1
pp. 46-54

董万命

1977「沙俄对我國東部辺疆的侵略与吳大澂一八八
六年琿春勘界」『延辺大学学報』1 pp. 84-95
→『東疆研究論集』吉林文史出版社、1993
pp. 199-217

1978「一八六一年興凱湖会谈勘界与沙俄的侵略拏
張陰謀」『延辺大学学報』2 pp. 64-69
→『東疆研究論集』吉林文史出版社、1993
pp. 187-198

1979「吳大澂評價問題簡議」『北方論叢』6
pp. 68-72

1981「吳大澂与琿春勘界」社会科学戦線編輯部編
『中国近代史研究論叢』吉林人民出版社
pp. 169-189

1984「關於東海恰喀拉人歷史的探討」『歷史档案』
2 pp. 90-94

任熙俊

1995「長白山“定界碑”始末—兼考図們江辺界問
題」『中朝關係史研究論文集』吉林文史出版社
pp. 235-252

白洪希

1999「康熙皇帝对東北的經略与治理」『社会科学輯
刊』4 pp. 102-105

馬蔚雲

2010『中東鐵路与黒龍江文化』黒龍江大学出版社
324p

馬孟龍

2009「穆克登查辺与皇輿全覽図編繪」『中国辺疆史
地研究』3 pp. 85-99, 148-149

潘曉偉

2011a黄定天「1863～1884年俄国境内朝鮮移民問題」
『人口学刊』2 pp. 64-68

2011b「1863～1884年俄国对遼東朝鮮人政策探析」
『北方文物』4 pp. 76-79

費馳

2006「清代中朝辺境互市貿易的演變探析」『東北師
範大学報(哲学社会科学版)』3 pp. 76-80

2007「清末民初中朝辺境商埠及其國際貿易研究」
『社会科学戦線』1 pp. 85-89

2009「論清代中国東北与俄国貿易的變遷」『中国辺
疆史地研究』3 pp. 133-139

2010「20世紀初延辺地区開埠与東北亜政治格局的
變化」『東疆学刊』3 pp. 70-75

馮堅

1980「雅克薩戰役始末」『歷史教学』7 pp. 8-11

歩平

1983「中俄東部辺界的歷史考察」『学習与探索』6
pp. 125-131

方衍

1990「19世紀中葉中国朝鮮族開墾辺陲之貢獻」
『中国辺疆史地研究導報』5 pp. 15-19
→波・少布主編『黒龍江民族歷史与文化』中央
民族学院出版社、1993 pp. 382-391

宝音朝克圖

2003「清朝边防中的三種巡視制度解析」『清史研究』
4 pp. 67-73

2004「清代卡倫官兵的卡制度解析」『内蒙古大学学
報(人文社会科学版)』3 pp. 56-59

2005『清代北部辺疆卡倫研究』中国人民大学出版
社 300p

龐昌偉

2001a「《中俄尼布楚条約》烏第河未定界範圍及界
碑考略」『黒河学刊』1 pp. 74-80

2001b「《中俄尼布楚条約》烏第河未定界範圍及界
碑考」『学習与探索』4 pp. 127-129

朴吉春

1989「從《東三省政略》看近代朝鮮族入籍問題」

『延辺大学学報(社会科学版)』1 pp. 157-165
→『朝鮮族研究論叢』3、延辺人民出版社、1991
pp. 209-227

朴昌昱

1995『中国朝鮮族歴史研究』延辺大学出版社 536p

楊建林

2007『略論康熙第二次東巡与抵御沙俄侵略』『東北史地』6 pp. 33, 77-79

楊軍

2010『清代中朝边境貿易中的“攬頭”』『清史研究』1 pp. 109-114

葉高樹

1995『清季黑龍江部分開禁後的中俄界務糾紛』『輔仁歷史学報』7 pp. 119-143

楊俊峰

2004『清末延琿地区韓民越墾原因初探』『博物館研究』2 pp. 35-41

楊昭全

1982『十七世紀五十年代中期中朝軍民御俄戰爭』『史学月刊』4 pp. 91-93

1991『清代穆克登查边及中朝兩次勘界』『社会科学戰線』3 pp. 215-223

1993孫玉梅『中朝边界史』吉林文史出版社 633p

1994『中朝边界沿革及界務考証史料匯編』吉林文史出版社 1287p

2007車鉄九『中国朝鮮族革命闘争史』吉林人民出版社 578p

李花子

2004『17-18世紀中朝圍繞朝鮮人越境問題的交涉』『韓國学論文集』13 pp. 76-87

2005『清代中朝圍繞閩内流民在鴨綠江地区活動的交涉』『登州港与中韓交流国际學術討論会論文集』山東大学出版社 pp. 460-484

2008『穆克登錯定図們江源及朝鮮移柵位置考』『韓國学論文集』18 pp. 383-404

2011『康熙年間穆克登立碑位置再探』『社会科学輯刊』6 pp. 186-196

2006『清朝与朝鮮關係史研究』延辺大学出版社 278p

2011『明清時期中朝边界史研究』知識産権出版社 324p

李曉光

2011『1882-1911年間吉林琿春与朝日貿易狀況探究』『長春師範学院学報(人文社会科学版)』3

pp. 37-40

李健才

1991陳連開『清季中俄東部边界的勘定』『博物館研究』2 pp. 51-59, 73

→『東北史地考略(続)』吉林文史出版社、1995
pp. 255-272

李玄伯

1950『李文忠使俄与光緒中俄密約(1-5)』『大陸半月刊』1、3、4、6、8 pp. 14-19, pp. 21-24、
p. 23, pp. 24-26, pp. 15-19

1962『李文忠使俄与光緒中俄密約(下篇)』『大陸雜誌』6、7、8 pp. 163-169, pp. 216-221、
pp. 257-262

李洪錫

2002『甲午戦争時期延辺“越墾韓民”団結及其反对日本奸細の闘争』『延辺大学学報(社会科学版)』1 pp. 106-109

李細珠

2011『日韓合併与清末憲政改革』『近代史研究』4 pp. 105-119

李士良

1978干志耿『中俄“尼布楚条約”和清政府的巡辺制度』『哈爾濱師範学院』1
→『東北歴史地理論著匯編』第五冊、吉林人民出版社、1986 pp. 48-57

李濟棠

1989『中俄密約和中東鉄路の修築』黒龍江人民出版社 317p

李宗勛

2007『略論朝鮮与清朝貿易の形態和意義』『東北師範大学報(哲学社会科学版)』4 pp. 33-37

李澤昊

2007『徐世昌与中日“間島”交涉』『長春師範学院学報(人文社会科学版)』6 pp. 44-47

李朋

2010『吉黒両省鉄路交渉局の嬗変-1898~1917年中東鉄路附属地行政管理権研究』『中国辺疆史地研究』1 pp. 22-35

陸欽墀

1991『1858年和1860年東北边界的改变』『史学集刊』1991-2 pp. 35-43

栗振復

1983『乾隆防御沙俄侵略の措置』『歴史档案』3 pp. 84-91

劉遠圖

1994「關於歷史上名中俄边界“耶”字界牌的考察」
『社会科学戰線』5 pp. 166-172

1993『早期中俄東段边界研究』中国社会科学出版社 369p

劉家磊

1980「二十世紀初沙俄在海參崴迫害華僑的暴行」
『社会科学戰線』3 pp. 163-169

1982「中東路展地與反展地的鬭爭」『求是學刊』3
pp. 69, 90-95

劉毅政

1991『中俄雅克薩戰爭史』黑龍江人民出版社 243p

劉淑杰

1994「璦琿條約簽訂前沙俄武裝侵占黑龍江地区述
論」『北方文物』2 pp. 84-88

劉聲明

1998孟憲章、步平編譯『十七世紀沙俄侵略黑龍江
流域史資料』黑龍江教育出版社 571p

劉存寬

1987「國際外交史上的大騙局——論光緒中俄密約」
『社会科学戰線』2 pp. 182-191

劉邦厚

1980「1861年後清政府在黑龍江左岸的巡防活動」
『北方論叢』3 pp. 103-105

1985「江東六十四屯的“犁界”之爭及“蘇忠阿墾
地”事件」『社会科学戰線』2 pp. 167-170

廉松心

2009「清代對鴨綠江北岸朝鮮移民的政策」『社会科
学戰線』8 pp. 156-162

2010「清朝同治年間鴨綠江中上游地区的社会狀況」
『中国边疆史地研究』2 pp. 97-104

2011「清末民初中国鴨綠江流域的朝鮮移民社会」
『黑龍江民族叢刊』2 pp. 83-88

呂一燃

1994a「俄国強占拉哈蘇蘇與中俄交涉」『中国边疆
史地研究』1 pp. 44-53

1994b「關於早期中俄東段边界的幾個問題」『中国
边疆史地研究』4 pp. 1-12

呂光天

1957「十九世紀末期朝鮮人遷入延辺自治州的發展」
『中国民族問題研究集刊』6 pp. 242-263

→『北方民族原始社会形態研究』寧夏人民出版
社、1981 pp. 479-506

文献リスト英語**David Wolff.**

*To the Harbin Station The Liberal Alternative
in Russian Manchuria, 1898-1914.* Stanford,
California : Stanford University Press,
1999 255p

James R. Gibson

“Russia on the Pacific: The Role of The
Amur” *Canadian Geographer* 12-1, 1968
pp. 15-27

Malozemoff Andrew

Russian Far Eastern policy 1881-1904 New
York : Octagon Books, 1958 358p
→『俄国的遠東政策』商務印書館、1977 444p

Mark Bassin

*Imperial Visions Nationalist Imagination and
Geographical Expansion in the Russian Far
East, 1840-1865* Cambridge : Cambridge
University Press 1999 329p

Rosemary Quested

*The Expansion of Russia in East Asia
1857-1860* Singapore : University of Malaya
Press 1968 339p

“Matey” Imperialists ? *The Tsarist Russians
in Manchuria 1895-1917* : Center for Asian
Studies University of Hong Kong 1982 430p

S.C.M. Paine.

*Imperial Rivals China, Russia, and Their
Disputed Frontier.* Armonk : M.E. Sharpe,
1996 417p